

エクリチュールとしての絵画—アルベール・オーリエの象徴主義

伊藤亜紗（日本学術振興会）

芸術の歴史において、表現が現実の再現から解放されることと、形式的な諸価値を追求しはじめることは、ひとつのセットになった出来事として理解されがちである。モーリス・ドゥニが『新伝統主義の定義』（一八九〇年）の冒頭に記した一節、「絵画が一軍馬や裸婦や何らかの逸話である以前に一本質的にある秩序で集められた色彩で覆われた平坦な表面であることを、思い起こすべきである」がまるでスローガンのように頻りに引用されてきたのも、それが、この「非再現性」と「形式主義」の密接な結びつきを端的に理解させてくれる一節であるからに他ならない。現実との模倣的關係を絶った芸術が、絵画であれば色や線といったその媒体固有の形式的価値の探究に向かい、その果てに抽象芸術が誕生する一十九世紀末から二十世紀初頭にかけて起こった根本的な表現のあり方の変化は、しばしばこのような仕方でも語られる。確かに、非再現性と形式主義のあいだには論理的な結びつきがある。しかし、そのことがただちに、十九世紀から二十世紀初頭という時代のただなかにおいて、両者がつねに結びついていたことを意味するわけではない。本論は、一八九一年に絵画における象徴主義宣言と位置づけられるテキスト「絵画における象徴主義—ポール・ゴーギャン」を発表し、ドゥニとは正反対の絵画観を提示したことで知られる文学者・批評家のアルベール・オーリエをとりあげながら、形式主義ではない非再現的芸術の可能性を検証する。

ドゥニら画家たちにとって、再現性批判とはすなわち主題の優位への批判である。絵画は、文学的な主題を再現するものであるかぎり、その意味を解説する文学（批評）に対して従属的な位置に立たざるをえない。そう考える彼らは、色彩や形態を単純化し、その形式的効果を前面に出すような絵画を制作した。一方、オーリエにとって再現性批判とはすなわち物質主義への批判である。物質的な外観の再現にこだわっているかぎり、アカデミズム的理想主義も、印象派も、ひとしくレアリズムであるとオーリエは言う。目指すべきは、形を「記号」として用いながら観念を「書く」ことである。つまり画家たちにとって形が「目的」であったのに対し、オーリエはそれを「手段」として用いる。オーリエにとって、色彩や形態の単純化は、そこに描かれたものがイリュージョンではなく記号であることを示すための符牒である。観者は画布のうえに見えるもの（イリュージョン）を否定しつつ、見るべきものとしての観念をそこに「読む」。形式主義ではない非再現的芸術の可能性とは、このように、観者に意味の構成者としての役割を付与することによって生まれるものである。オーリエの急逝によってこの可能性は十分に展開されることがなかったが、形を記号として扱う芸術は、ダダやネオダダによって継承されたと言えよう。